

『髮・鬚・爪』*序

わたしは嗜好の頗る多い人間である。もしそんな力があるなら、書籍ばかりか、骨董でも買いたいし、金、石、瓷、瓦に論なく、なんでも好きだ。いまは、古物の露店で買った“鳳凰磚”一枚、“石十五郎鏡”一面と“亀鶴齊寿”という錢一枚以外に、何もなく、何冊かの新旧の書物を繰って、なんとか暇つぶしをするしかなく、その書物にしたところでこれまた此の如く乱雑なのである。小説を読むのも好きだが、時には放り出したくなり、昆虫についての本や、野蛮人についての本を探して読みたくなり、まるで少しも系統というものが無い。しかし同じようなもので、わたしが好きで、嫌になったことがなく、かつわたしの無茶苦茶な趣味を統一するに足りそうなものがある、それは神話だ。わたしが最初に訳した小説はハッガードとアンドリュー・ラングの合作の『紅星逸史』(The World's Desire by H. R. Haggard and Andrew Lang)で、半分は林訳『哈氏叢書』の影響であり、半分はラング氏の著書の影響である。東京の書店で『銀叢書』(The Silver Library)のなかの『習俗と神話』(Custom and Myth)、『神話儀式と宗教』(Myth, Ritual and Religion)などの書を買って、人類学派の神話解釈をほぼ知り、神話に対して深い興味を覚え、二十年来変わったことはない。いまは教師をしているけれども、自分の職業が何かを言うことはできないが、わたしの趣味はギリシア神話にあると言える。ギリシアのは世界で最も美しい神話であるからだ。時には牧歌を読みたいと思ったり、時には蜘蛛の結婚を知りたいと思ったりするが、実際は輪のなかをグルグル走り回っているだけで、その輪から外に出たことはないようだ。

わたしが神話と神話学を読むのは全くの娯楽であって、なんの専門的な研究でもない。だが時にはやはり野心がないでもない。一、二年のうちに自分でギリシア神話の書を訳したいと思ったり、同時にまた誰かが文化を述べたりあるいはただ宗教道徳の起源と発達の略史でもいいから編訳してくれたらなあと思ったりする。ふだんフィンランドのウェスターマーク教授(E. Westermarck)の道徳観念の変遷という大著を開くたびに、彼に対して肅然たる敬意を起し、心にそれが人類の思想の解放の上にかに功績があるかを思って、ほんとうに“良書”と言えると思うのである。天は不変であり道もまた不変であると信じている中国では、実にこうした著作が切実に必要なのである。たとい小冊子でもよい。道徳が決して不変でないことを示し、金科玉条の迷夢を打ち破ることができる人が出てくるならば、世道人心に有益なこと実に浅からぬものがある。以前この事を社会学を研究している友人に託した事があるが、時は過ぎて十年、杳として希望はない。社会学者たちはほとんどが社会政策をやるようで、ただ現代に注目するばかりで、歴史の研究には大抵が重きをおかないからである。この事は中国ができるだけ早く様になった民主国家になる事を切望しているが、早急には成功できないようだから、本来責めるには当たらない。いささか失望は免れがたいけれども。しかしここ二年来、紹原とわたしは少し筆墨の遊戯をやって、手始めに「礼部文件」を発表した。当初は“閑話”をやるばかりだったが、後になって嘘から出た実で、紹原の「礼部文件」はついに礼教の研究にまで成長し、わたしが社会学者に期待したものとまったく途を殊にして同じ目的に達したのである。これは実に喜ばしいこ

とである。わたしがいま計画しているのは、紹原がその第何巻かの論文集を出した時に、わたしのギリシア神話の翻訳に手を着けねばということである。

紹原は宗教学を専攻するものである。わたしは紹原が北京大学にいた頃知り合った。ある日の放課後、紹原がやってきて日本の何はどんなものかと聞き、わたしを引っ張って図書館の閲覧室に行き、『アジア』という英文雑誌を取り出してわたしに見せた。もともと誰かが訳した何首かの“Dodoitsu”で、日本人が漢字で“都都逸”と書く、近代の俗歌であった。わたし自身は都都逸が好きだったが、人に勧めて無理やり読ませるほどではなかった。しかし紹原のような都都逸を調べようという好奇と好事は、とても貴重なものに思われた。これがそういう研究を成就させた理由だと言えるだろう。でなければ他人がヒゲを剃ったり、爪を噛んだり、他の何かをしたりすることが、こんなに注目するに値しようか。紹原は宗教学を学んだが、何かの宗教を信ずるのではない。すこぶる不思議に思う人があるかもしれないが、（彼らは宗教学者はすなわち教徒だと思っている）しかしまさしく当然であって、しかもそうだからこそ彼はさらに礼教を研究する仕事に向いており、公平な結論を得ることができるのである。紹原の文章は、またみんな知ってのとおり、どうしてだか謹厳と遊戯をあのようによく混合でき、別に一種独特の風格があつて、学術上の問題の討論に持ってきても、少しも七面倒臭さを感じさせない。そうしたわけで、わたしは紹原の研究論文の出版はきっと成功すると信じている。古史について懐疑を示した人がいて、中国の学术界にかなりの刺激を与えたが、紹原の書はもっと大きな影響があるだろう。わたしには紹原の研究はかなりの中国の礼教の迷信の起源を闡明しており、学術に有益なほかに、青年に大きな暗示を与え、明白な頭脳を養い、現代の復古の反動に反抗し、もっと実効的な効用があるだろうと思われるからである。わたしは以前青年に一冊の文法書あるいは幾何の書を恋人とともに読んで、夏休みの暇つぶしにするよう勧めたことがある。いま同様に少しも躊躇することなくこの鬚爪の迷信に関する——礼教研究の第一巻たる小書を付け加え、青年必読書の一つとする。わたし個人の嗜好によって。

民国十五年十一月一日、北京苦雨齋にて。

※初出：1926年11月『語絲』第105期

* 『鬚爪』 江紹原著 1928年3月上海開明書店初版。近刊では1987年12月上海文藝出版社影印版がある。